



「ブラッドランド」のナショナル リズムーバビ・ヤールからウクライナ 史を見る

2022年12月10日 日本学術会議哲学委員会

重田 園江 (明治大学)

『ブラッドランド』（ティモシー・スナイダー、2012）
第二次大戦の独ソ戦前後の時期を、ソ連東欧地域（ポーランド、ベラルーシ、ウクライナ、バルト三国、ルーマニア、ロシア西部）における「ソ連の蛮行」と「ナチスの蛮行」を地続きに捉える試み。



この地域で1400万人が1930年代から第二次大戦期に死んだ。

*日本は十五年戦争で、軍人、植民地民間人、内地民間人合わせて310万人が死んだとされる。

スナイダーは、バルト三国などでのナチによるユダヤ人虐殺を、ソ連とナチスの合作と捉えている。

本書のサブタイトルは、Europe Between Hitler and Stalinで、日本語訳「ヒトラーとスターリン大虐殺の真実」は、Betweenのニュアンスを汲んでいなくて残念

1930年代にソ連が行っていたことー

ホロドモール（人工的大飢饉）＝全ての食糧を徴収し、翌年蒔く種子さえない。突然食糧を取り上げられたウクライナの人々は、自分の子どもを食べたり、子どもが屍肉を食べたりした。

NKVDによる支配ー理由のわからない逮捕、監視網と密告の奨励、収監と拷問、処刑、規律化された都市生活

→このなかで醸成された住民の恐怖と憎悪が、ソ連を追い払ったナチへの一時的な支持と、NKVDの手先であると信じられていたユダヤ人への敵意となった。

つまりナチスの蛮行は、これらの地ではソ連によって準備された精神的土壌の上に育った→ソ連圏では収容所なしのホロコーストが可能に。

これがスナイダーが between に込めた意味。

セルゲイ・ロズニツァ「バビ・ヤール：コンテクスト」
(2021) 10月～イメージ・フォーラムほか全国公開

キーウ近郊のバビ・ヤールの谷で、1941年9月29日と30日の二日間に、33771人のユダヤ人が虐殺されて埋められた。



ロズニツァの問いは、「なぜこんな短期間に大勢を殺すことができたのか」

→現地人の協力がなければ無理でしょう
というもの

だがこの主張（というか、アーカイヴ映像でそれを示しちゃったこと）によりウクライナでは大変な批判に遭う。ちょうどロシアの侵攻と重なったことで、ロズニツァは多方面から批判された。

こんな映画を作っちゃったら、ロシアからやっぱりお前らはナチだって言われちゃうじゃん！というのが批判者の本音だと思われる。

ここに、バビ・ヤールの犠牲者追悼のあり方という問題が絡む。

バビ・ヤールではユダヤ人以外にも殺された。ロマの人々、精神障害者（近くの病院にいた）、ウクライナ民族主義者（OUNメンバー）、政治犯、囚人など。

「ソ連の犠牲者追悼」 (スターリンのイデオロギー)

→①バビ・ヤールで犠牲になった全ての人々の追悼

→②1941年に大量虐殺されたユダヤ人の追悼

①は現地人の対ナチ協力を不問に (ウクライナ民族主義者の英雄化というナショナリズム)

②は現地人の対ナチ協力を晒し出す (ロズニツァの立場)

②は反ナショナリズムでロシアの手先なの？

対ナチ協力がなぜ行われたのかを見ていくことで、ソ連の蛮行があぶり出され、ウクライナのロシアからの自立の必要性が一層明らかになるはずなのに、、、

ウクライナ民族主義者の対ナチ協力は、明らかにスターリンとNKVDのとんでもジェノサイドに起因する。

これを理解せず、過去の嫌な記憶は封印するようなナショナリズムは、共産主義からの離脱を共産主義的手法で行う「記憶の国家管理」を伴ってしまふ。

ウクライナにとっては、いずれにしても自分たちはつねに国土を蹂躪された被害者であるのだから、ナショナリズムを再考するのはそんなに難しくないようにも思われる。

ソ連とナチスは両方ひどい。両方のせいで対独協力が行われたが、これはウクライナだけではない。そこまでさせられるほどソ連はひどいことをした上。結局赤軍とともに戦い、多くの犠牲者が出た。

そもそもソ連→ロシアは人命軽視が甚だしい（ロシア人に対しても）、と言える気がします。

では日本の場合はどうなのでしょう、、、

十五年戦争期に朝鮮半島・中国・東南アジア、その前から台湾でやったこと

歴史修正主義ってけっこうすごいですよね。自国に誇りを持ってない歴史を教えるのは「自虐史観」で、、、

歴史っていうのは「自虐」とか誇りとかいう前に、事実というものがあるんじゃないのか？

従軍慰安婦問題、関東大震災での朝鮮人虐殺問題、南京大虐殺の有無などに戦争責任と歴史認識の問題を収斂させていく言説空間自体に、入らないやり方があるのではないのでしょうか。

1. 1945年から1949年までの「戦後」

戦争の記憶と犠牲が生々しく、また戦後社会の可能性がさまざまにあり得た時代、つまり朝鮮戦争前の日本で、戦争がどのように捉えられ、戦後社会はどうやって動いていたのか。

- GHQ支配と天皇の戦争責任
- 平和憲法と米軍基地
- 闇市と物資横流し
- 戦犯裁判への見方 など

権力者への強い不信感と誰に何の責任があるのか、の問い
兵士、入植者、一般の日本人の戦争責任の捉え方は？

•

•

2. スナイダーやロズニツァに倣って、二国間関係ではなく多国間関係として戦争と戦後史を捉える

たとえば、

南基正（聞き手：鈴木英生）「戦場国家・韓国から見た日本の平和主義 反戦というより「避戦」」

毎日新聞2022年10月3日

- 日本は戦後「平和憲法」の国になったことで、朝鮮半島でずっと続く戦争と自分たちを切り離した。
- 朝鮮戦争は休戦中であって終戦に至っていない（日本で知られている？）。
- 韓国の徴兵（一年半から二年）日本で徴兵って考えられます？

・なぜ日本には徴兵がないのか？→平和憲法

韓国のいまと無関係ではない。

韓国が日本の植民地だったことと朝鮮戦争が起きたことは、日本では関係ないことになっていないか？そして戦争特需が日本に与えた影響は計り知れない。

・日本は基地国家、朝鮮半島は戦争国家となることで、戦後アメリカの太平洋安全保障体制が作られた。

・朝鮮戦争を終わらせるチャンスが潰えたのには、アメリカのみならず日本の安全保障政策も関係している。

・サンフランシスコ講和条約も日米安保条約も、朝鮮戦争があってできたもの。

→韓国との関係を二国間で捉え、「日本に謝罪を求めろ
うざい隣国」として扱うことで得をしているのは誰なのか。

戦後の日韓関係は日米関係、韓米関係と切り離すことはできず、また沖縄の基地問題や日米地位協定なども、アメリカとの二国間ではなく、朝鮮半島とアメリカとの関係、また北朝鮮を挟んだ中国との関係などと関連づけて捉えるべき。

せっかくグローバルヒストリーが流行っているんだから、東アジアも多国間関係の歴史認識によって、暗礁に乗り上げた戦争責任論の言説空間から脱することを模索すべきでは？